

フィールドデザイン論研究

研究代表者 古谷 誠章
(創造理工学部・建築学科・教授)

1. 研究課題

日本社会では情報技術の発達や産業構造の変化、人口移動等による社会・経済情勢の変化に伴い、社会構造が急激に変化している。この変化に伴い各地の住民の生活は絶えず変化を求められており、しかしその変化に対応できず産業の衰退や人口減少といった問題に直面している市町村は少なくない。本研究では、行政区等における目に見えたコミュニティや範囲を超えた広域的な人・文化・地域を「フィールド」として捉え、社会経済情勢の変動と共に変化する住民生活や「フィールド」がもっている価値を発見し、それらを動かしているメカニズムを解明することで、各地の住民の生活が続き発展することが可能なデザイン手法の模索と提案を行う。

行政区を超えた広域な地域「フィールド」づくりの推進や生活構築の観点から、地域に現存するリソースの見直し・住民のまちづくりへの参加等を通じて、地域リソースの有効な活用方法に関する具体的設計指針の改革が不可欠となっている。

これら地域に関する問題に意欲的に取り組もうとする地方都市や建築・都市デザイン関連機関からの委託により具体的な実践に基づくこと、および本研究組織で過去行った 10 を超える事例の整理から固有な手法・提案から、フィールドデザイン論に展開していく。

2. 主な研究成果

- 2-1. 新潟県上越市月影小学校/千葉県鋸南町における二拠点居住促進計画
- 2-2. 島根県雲南市 中山間地域での地域と大学生等による交流ゾーン形成事業
- 2-3. 奈良県 吉野材(スギ・ヒノキ)を活かした木質空間デザインの提案
- 2-4. 岐阜県美濃加茂市 旧伊深村役場庁舎を核とした地域づくり業務
- 2-5. 田野畑村 思惟エリア一体整備構想の策定

2-1. 新潟県上越市月影小学校/千葉県鋸南町における二拠点居住促進計画

月影プロジェクトは 2020 年度で 16 年目を迎えた。しかし、COVID-19 の影響で直接足を運ぶことは出来なかったため、月影の郷 館長横尾氏と協力してこれまでの活動をまとめたアーカイブ冊子のデザインなどを検討した。

鋸南プロジェクトは 2020 年度で 8 年目を迎えた。廃校になった旧保田小学校は改修され、2015 年 12 月に、「都市交流施設・道の駅保田小学校」として開業した。2020 年度は都市交流施設計画時から検討課題となっていた「二拠点居住」を促進するために、学生が自らの足で鋸南町の魅力・課題をミクロな視点から探った。

2-1-1. 月影プロジェクト

現在取り組んでいるアーカイブ冊子のデザインについて、未完のため省略。

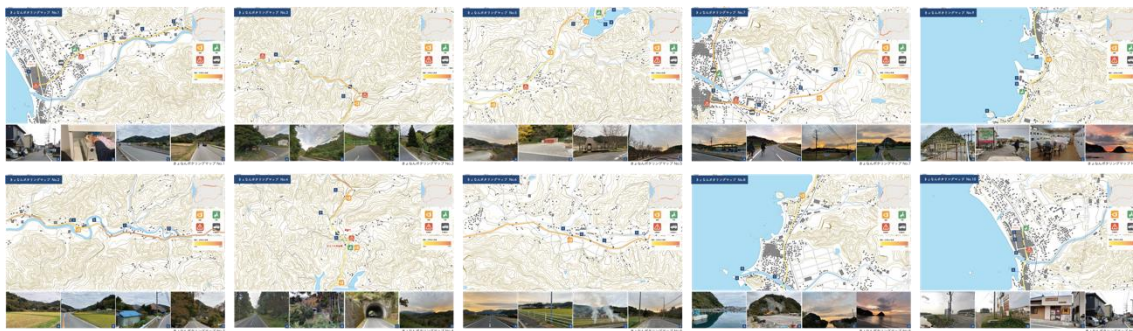
2-1-2. 鋸南プロジェクト

二拠点居住促進計画と題して、①地域資源調査②交通系調査③ヒアリング調査④意見交換ワークショップと佐久を中心に鋸南プロジェクトが今後も関わるであろう鋸南町の現状をまとめている。各地の現状把握調査をもとに二拠点居住としての可能性を探ることを目的とし、今後の具体的な提案につなげていくことを展望としている。

2-1-2-① 地域資源調査

鋸南町での現地調査の前に町内外にどのような資源があるか俯瞰的に調査し、以降の調査内容を深める。本資料は学生がインターネットで調べ、以下のフォーマットにまとめた。

fig.1 歩行空間調査MAP(道の駅穂田小学校～町役場までの約4.5km)



2-1-2-② 交通系調査 -駅-

本調査では、鋸南町にある駅の中でも保田駅と安房勝山駅を選定し、各駅の周辺状況やその関係性を調査した。本調査の目的は、鋸南町における多拠点居住を促進するために、移動手段に関する一次資料を作成することである。

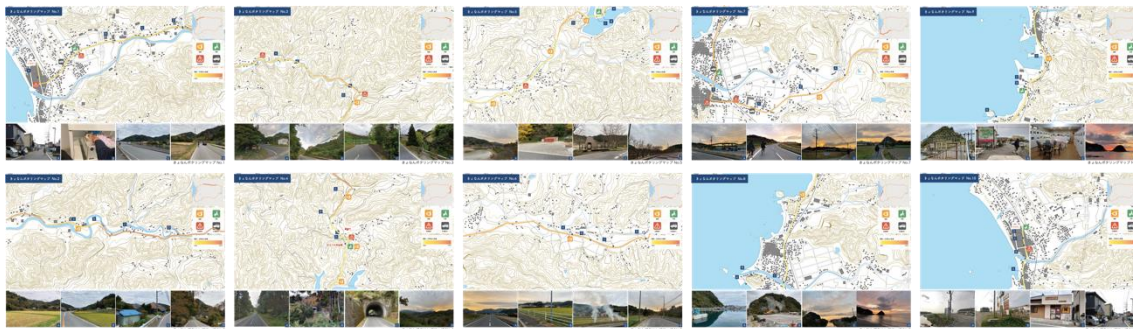
fig.2 駅空間(保田駅・安房勝山駅)と周辺敷地調査MAP



交通系調査 -ポタリング(散歩+サイクリング)-

鋸南町には複数のサイクリングコースが設定されており、佐久間ダムの緑豊かな木々や港から見える水平線など都会にはない自然を体験するコースで、週末にはサイクリストの姿も見られる。二拠点居住における自転車移動の可能性を探るために、実際に学生もそのコースを体感することで特徴や課題点を整理し、鋸南町の魅力を再発見するとともに、二拠点居住する際の移動手段としての可能性を探るための資料とする。

fig.3 ポタリングMAP



交通系調査 -バス-

高齢者の免許返納問題は避けられないものである。しかし、自動車社会である地方都市では免許を返納した途端に交通難民となる可能性があるため、高齢者の移動支援など免許返納がしやすい環境整備が求められる。そこで、高齢者にとって必要不可欠な移動手段であるバスの利用状況やバス停の状況を調査し、今後の利用方法などを探る。

fig.4 バス停空間を調査する様子



2-1-2-③ ヒアリング調査

鋸南町の二拠点居住としての可能性を把握するために、現状を調査した結果、町に実際に暮らす人にも着目することが大事なのではないかと考えた。鋸南町を居住先に選んだ理由、住んで感じる良さ・課題、実際にどのような生活をしているかを把握することで、「鋸南町に住む」という目線から町の魅力や今後の展望を構想し、鋸南町の二拠点居住促進の可能性を探る。

fig.5 保田小学校周辺にてヒアリングする様子



2-1-2-④ 意見交換ワークショップ

今年度は、鋸南町での二拠点居住促進を目的とし、鋸南町の地域資源を調査した。その中で、実際に鋸南町で生活する方々のご協力の下、生活の様子・鋸南町の魅力・今後の展望について知ることで、「住む」という目線から生の声を聞いて鋸南町を深く学ぶことができた。

そこで本ワークショップ開催により、それぞれの人が持つ意見や情報を把握・交換することで、鋸南町活性化のためのニーズを多角的に探りたいと考えた。また、参加者の事業促進・参加者同士のネットワーク構築のきっかけとなることを期待する。

fig.6 ZOOM上にて集合写真



2-2. 島根県雲南市 中山間地域での地域と大学生等による交流ゾーン形成事業

島根県雲南市と早稲田大学古谷誠章研究室の連携事業、2020年度コワーキングスペースを活用した交流促進ゾーンの形成事業の調査・地元学生、住民とのワークショップ・提案を行った。今年度は新型コロナウイルス感染症により、多くの活動が影響を受けたが、来年度以降の活動の準備期間としての取り組みを行った。今年度の活動が、次年度に繋がることを願うと共に、研究室としても引き続き活動していきたい。

2-2-1. さくら祭り 2020

木次町木次商店街での活動に関して扱う。さくらまつり 2020 は新型コロナウイルス感染症により、開催はかなわなかったが、予定していた作業を記載する。2021 年も同じく新型コロナウイルス感染症により開催が見送られる予定だが、2022 年度のさくらまつりに向けた取り組みとして記載する。

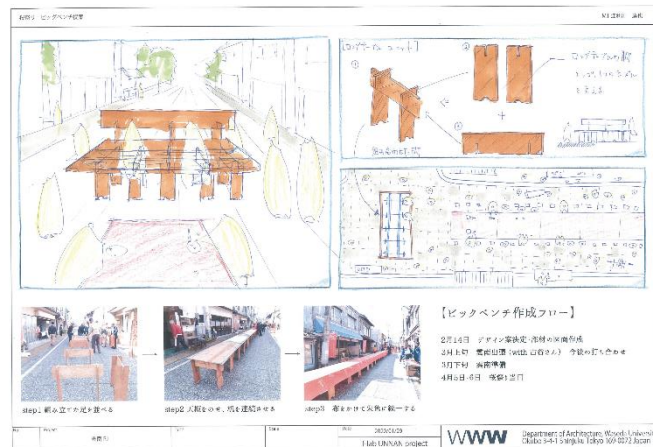


fig1. 提案一例

2-2-2. 島根県の木材を活用したコワーキングスペース「オトナリ」の中庭の活用提案

木次町における空き家の改修提案を行い、感染症に十分注意を払ったうえで雲南市に赴き、オープニングセレモニーに参加し、タスキ株式会社と共同作業でまちのワーキングスペース「オトナリ」の内装作業を行った。また、渡辺製材所とグリーンパワーうんなんの見学に参加し、島根県の木材を活用した中庭の活用方法を提案し、地域住民の交流促進のためのベンチの設計提案を行った。実施を来年度前半期に行う予定である。



fig2. グリーンパワーうんなんの見学



fig3. 地元住民とのワークショップ

2-2-3. 地域住民の交流促進のためのベンチの設計提案



fig4. 提案一例



fig5. 提案一例

2-2-4. 久野小学校改修提案

2019年度に行った地元の人々とWSから、久野小学校の活用方法の提案を行った。廃校になった久野小学校の改修提案を行った。昨年度の久野地区WSの提案内容を参考にし、旧小学校すべてを再利用する・特別棟のみにする・旧小学校を再利用しない、の三パターンにわけ、今年度四月にオープンした久野地区交流センター（旧・久野幼稚園）との連続性も考え、提案を進めた。

久野小学校は取り壊しが決まったが、廃校になる小学校は、少子高齢化により今後も増え続ける問題であり、今提案を地域再生モデルの一つとして全国へ発信できるようにプロトタイプにしていることが今後の目標である。



fig6. 提案一例

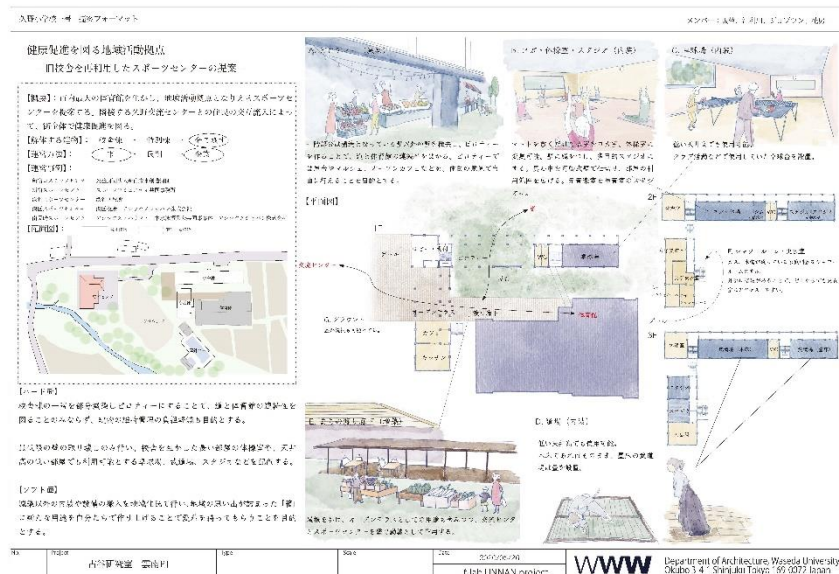


fig7. 提案一例

2-2-5. その他活動

「雲南プロジェクトアーカイブ 2020 年版」の作成

2-3. 奈良県産材を活かしたビジネスデザインの提案

吉野材の魅力を最大限に活かした新しいブランドづくりを推進し、県の林業・木材産業の振興を図ることを目的とし、吉野材の魅力を最大限に引き出す木質空間としての新しい用途の調査及びデ

デザイン開発を行う。今年度は、奈良県庁奈良の木ブランド課からの依頼を受け、過去10年間に渡る連携事業にて生み出されたデザインを、森林環境譲与税の使途の参考事例としてまとめたブックレットの作成を行った。これらを森林環境譲与税を通じて実現することで、奈良県産材の良さを実現・発信することを目的とした。

また、多くの県外の方々が奈良訪問の窓口として利用する奈良公園バスターミナルにおいて、ベンチ不足などの問題を解消し、居心地の良い空間を作り出すと同時に、奈良県産材の良さを発信するため、吉野材(スギ・ヒノキ)を用いた什器デザインの提案を行った。奈良の木ブランド課の要望である①奈良の木の利用促進につながるもの、②木に触れて木の良さを感じてもらえるもの、③移設可能で木質の空間をつくりだせるもの、という条件のもとで複数のデザイン提案を行った。また、提案物の1つは実際に施工が行われた。また、奈良県内での木材活用として吉野以外の地域の林業や奈良県産材の視察を行うことで、吉野材だけではなく奈良県全体で抱えている林業・木材の知見を得る。

2-3-1. 森林環境譲与税の使い道に関する提案ブックレットの作成

本ブックレットは森林環境譲与税の使い道を奈良県と早稲田大学古谷研究室の過去10年間に渡る連携事業にて生み出されたデザインに基づき例示するものである。

奈良県産材を様々な工夫を凝らしてデザインに使用することで奈良県産材への興味の有無によらず幅広い世代・立場の人々への還元やPRができるのではないかと考えた。

そこで、奈良県産材の良さが伝わるようなデザイン提案を「空間」「家具・什器」「小物・プロダクト」「PR・その他」の4つの手法に分類し目的別に選択できるようにした。(以下fig1~2はブックレット写真)



fig.1



fig.2

2-3-2. 吉野材を用いた什器提案

奈良公園バスターミナルのエンタランスとインフォメーションセンターを対象とし、什器からシェーディングまで様々なスケールの提案をした。プロジェクトメンバーからの様々な提案があった中で、「コモレビカグ」の提案が採用され、2021年3月15日から奈良公園バスターミナルにて3種類のユニットが計5台設置されることになった。「コモレビカグ」は、複数のユニットで構成され利用客に奈良県産材の木目や色合いの美しさ、香りの良さを感じられるような什器としてデザインされている。また、それぞれのユニットを組み合わせることでベンチやカウンター、棚などへと

姿を変え、棚板の隙間に本やパンフレットを置くことで展示台としても機能する。奈良公園バスターミナルに「コモレビカグ」を中心とした新たな心地よい空間が形成・定着することを願っている。
(以下 fig3～5 は什器写真)



fig.3



fig.4



fig.5

2-4. 岐阜県美濃加茂市 北部地域の交流促進と賑わい創出による地域活性化業務

2017年度に古谷誠章研究室で再生活用デザインを行なった旧伊深村役場庁舎を拠点として、人口減少が進む伊深地区の地域活性化につながる事業の仕組みづくり・デザインの提案を行う。

2-4-1. 地域活性化に必要な住民意識の向上

広域まちづくりを含めた地域活性化を促進するためには、住民自身が地域の魅力に自覚的になることが必要だと考え、昨年行なった地元住民への伊深地区のオーラルヒストリーを元に建築学科の学生として「模型表現」という形で地域の場所の魅力を立体的に視認できるような物を作成した。さらにその模型をプラットフォームとして、写真をシェアするシステムを付加することで、誰でも場所の風景を見ることを可能にした。

また、写真を共有するために、Google Driveを用い、その共有リンクをQRコードとし、使い方のダイアグラムを作成し、パネルとしてまとめた。



fig.1 模型表現

Google アカウント作成

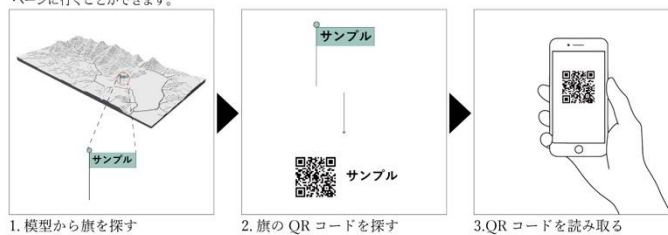
写真を共有するためには、Google アカウントの作成が必要になります。以下 QR コードより作成をお願いいたします。



1. アカウントの作成

みんなの写真をみる方法

模型で気になる場所を探し、旗に書いてある名前の QR コードを探し QR コードを読み取ることで、写真が保存されているページに行くことができます。



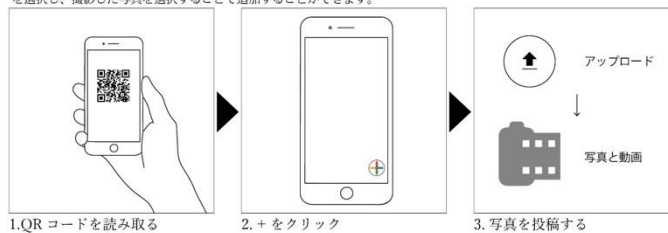
1. 模型から旗を探す

2. 旗の QR コードを探す

3. QR コードを読み取る

自分の写真を追加する方法

写真を撮影した場所の QR コードを読み取り、右下に表示された+ボタンをクリックし、「アップロード」、「写真と動画」を選択し、撮影した写真を選択することで追加することができます。



1. QR コードを読み取る

2. + をクリック

3. 写真を投稿する

fig.2 写真共有

道の駅たのはた「思惟の風」と「田野畑村農林水産体験交流施設 思惟創館」のオープンに向けサイン計画を行った。田野畑村の「海」「山（大地）」をテーマに色を抽出し、二色をメインに補色や反対色を用い全体の色彩を調整した。サインの文字や線を単純な白色ではなく、田野畑の木「桐」、花「シロバナシャクナゲ」から抽出した淡い色を用いた。トイレなどのサインマークは学生間でコンペ形式で行い、採用された一案を思惟の風、思惟創館ともに起用している。

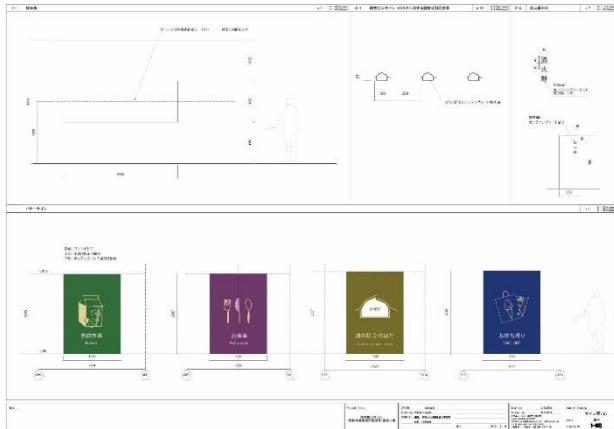


fig1:道の駅たのはたサイン計画

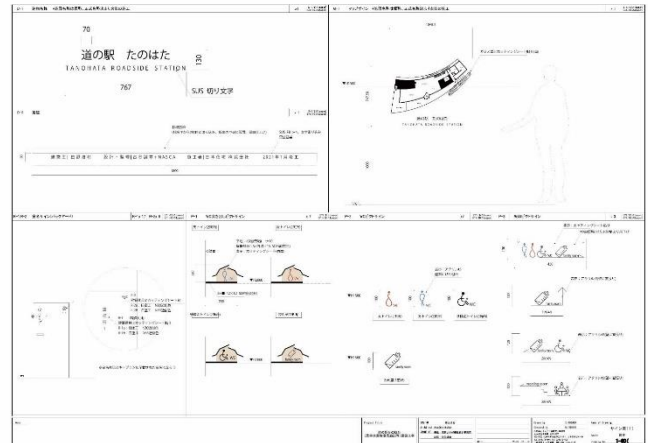


fig2:道の駅たのはたサイン計画



fig3:「思惟創館」



fig4:道の駅たのはた「思惟の風」



fig5:思惟創館サイン図

2-5-3. 田野畑村農林水産体験交流施設 思惟創館のパンフレット作成

思惟創館オープンに向けパンフレット制作を行った。役所の人が手軽に印刷でき、来訪者が持ち運びやすいサイズや折り方の様々なパターンを検討した末、A4 サイズの三つ折りを採用した。共有スペースの利用方法や、アクセス、館内のフロア説明がわかりやすくなるよう工夫した。



fig6:思惟創館のパンフレット

3. 共同研究者

斎藤 信吾（創造理工学部・講師）
根本 友樹（創造理工学部・嘱託研究員）
王 薪鵬（創造理工学部・講師）
宮嶋 春風（創造理工学部・助手）
池田 理哲（創造理工学部・助手）
陳 麟（創造理工学部・助手）

4. 研究業績

特になし

5. 研究活動の課題と展望

5-1. 新潟県上越市月影小学校/千葉県鋸南町における 2 拠点居住促進計画

今年度は新型コロナウイルスの影響により本プロジェクトの活動方法が変化し、鋸南町の方々も様々な制限が強いられた 1 年だった。

しかし、オンラインとオフラインを駆使することで、例年以上に鋸南町の方々との接点を頂けたと思う。貴重な機会をくださった鋸南町の方々、ご指導頂いた先生方に心から感謝申し上げます。

また 2019 年 9 月に発生した台風による被災の傷が癒えない中でのこの状況は大変苦しいものかと考える。来年度以降は徐々に行動しやすくなることを切に願い、その時の学生の力は今まで以上に生きてくるのではないかと感じている。

鋸南町の更なる発展のため、そしてこの困難を乗り越える手助けができるように引き続き活動に励んで参りたい。

5-2. 島根県雲南市 中山間地域での地域と大学生等による交流ゾーン形成事業

都市再生モデル調査以来、古谷研が雲南市に携わって 13 年目を迎えた。今年度は新型コロナ感染症の影響で、12 年間参加し続けたさくらまつりの中止を始め、多くの活動に影響が出たが、zoom を利用しコンスタントに雲南市と会議を進め、オンライン上で複数の提案を行った。それぞれの地区の状況を 13 年分のデータを参考に整理し、来年以降の雲南プロジェクトがより踏み込んだ地域活動ができるように、「雲南プロジェクトアーカイブ 2020 年版」を作成した。これからの活動目標を改めて考える機会となったのではないかと考えます。これらの資料が今後古谷研究室と雲南市のこれからの共同活動の助けになることを願う。

今年度前半期では、昨年度の久野小学校活用 WS の提案内容を参考にし、廃校になった久野小学校の改修提案を行った。残念ながら、久野小学校は取り壊しが決まったが、廃校になる小学校は、少子高齢化により今後も増え続ける問題であり、今提案を地域再生モデルの一つとして全国へ発信できるようなプロトタイプにしていくことが今後の目標であると考えます。また今後は、今年度の提案を活かし、実際に建築のスケールへと発展して行くことを目指していく。

後半期では、タスキ株式会社さんが行った空き家改修計画にメンバーとして加わり、中庭に設置するベンチの設計提案を行った。来年度の実施に向けて、発展して行くことを目指す。この改修計画を始め、今後は、木次商店街における他の空き家の改修計画や新民谷交流センターなど、さらに大きなプロジェクトに学生が関わって行きたい。

今年度は新型コロナウイルス感染症で思うように活動ができなかったが、この一年間を準備期間として、今までの 13 年間の活動から見えてきた地域との関係や情報の蓄積をおろそかにせず、それをもとに提案や活動ができるよう尽力していきたい。

5-3. 奈良県 吉野材(スギ・ヒノキ)を活かした木質空間デザインの提案

今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり学生メンバーが奈良県内を訪れる機会が少なかった。一方で Zoom 等のオンライン会議を用いることで、過去 10 年間に渡る連携事業のまとめでもあるブックレットの作成と新規の提案に注力することができた。特に、約 9 か月に渡り提案を続けてきた奈良公園バスターミナルの什器デザインにより、県の玄関口が奈良県産材の良さを発信できる空間となったことは大きな成果であったと思う。また、過去 10 年間に渡って生み出されてきたデザイン提案をまとめるという経験は多くの学びがあり奈良県産材の 1 本 1 本の特性や加工方法などを振り返りながら提案につなげていくプロセスを遡ることができた。

来年度以降、新型コロナウイルス感染症の流行が落ち着き、人々の出張や観光が増えることで今年度の活動内容がより効果を発揮してくれることを願っている。

県内と県外、両方で提案したビジョンを重ねれば、より広域な視点で木材を活用したデザイン提案が可能となることを、本連携研究では長年に渡り追求・実現してきた。これはより一般化することもできると考えられる。例えば、都市で木材や林業に興味を持った人々が、奈良県内の人工林を持つ吉野や、天然林を持つ上北山村に訪れることで、普段の暮らしの中にある木製品をより魅力的に感じたり、積極的に新しい使い道を見つけたりする機会が増えるといったことも期待できる。現体制での研究は今年度をもって一区切りとなるが、これからも奈良県産材を用いた様々なデザインと PR 活動とを両立した研究・提案を続けていくことで、奈良県産材を取り巻く環境や奈良県産材のブランド力の向上、更には林山地の活性化を図り、その利用拡大につなげていきたい。

5-4. 岐阜県美濃加茂市 旧伊深村役場庁舎再生活用基本デザイン策定業務

今年度は、2019 年度に行った WS によって得られた情報をもとに、模型とインターネットを用いた写真を共有する立体マップを完成することができた。バス停セルフビルドに関して、市側の準備が整っていないため、実行することはなかった。今後、美濃加茂市から依頼があれば、これまでの提案をもとに行っていく。

5-5. 田野畑村 思惟エリア一体整備構想の策定

本年度は、田野畑村移住促進事例収集、道の駅たのはたのサイン計画、田野畑村農林水産体験交流施設思惟創館パンフレットの作成を行うとともに、田野畑村移住促進事例収集と導入モデルの提案を行った。災害復興を行うとともに地域の少子高齢化や過疎化に向き合う村づくりが求められる田野畑村では、今後地域資源を生かした村の小さな居場所づくりを行うとともに、それらを一体的にデザインし、村の人が暮らしやすく持続可能な村のランドデザインを今後も意識して行っていくことが求められる。そのため、私たちは様々な提案、計画を行ううえでハード面の機能更新やソフト面を考えつつ、それぞれの場所での提案をつなげ、空間のデザインから地域計画までを一体的に意識して活動を行う必要があると考えられる。